

社会的承認と経済・健康・監視リスク

——女装者および女装者愛好男性の語りを事例として——

東洋大学 石井由香理

1 目的

本報告の目的は、女装者および女装者愛好男性の語りの分析から、かれらが直面する経済・健康・ネット上でのアウトティング等のリスクがどのようなものであるのか、そしてそれがかれらの置かれている状況、例えば、学歴や職業、家族構成などどのような関係にあるのかを明らかにする。女装者や女装者愛好男性については、商業世界の第一線にいた人や有名なドラッグ・クイーンなどを除いて、一般の人たちについての実態はほとんど明らかにされてこなかった。それはすなわち、かれらが抱えているリスクや困難性がどのようなものであるのかが把握されていないということであり、調査が求められる状況にある。

2 方法

本報告では、2017年9月から2019年3月の間に大阪市浪速区新世界エリアを中心に行われた半構造化面接法による調査データを用いた分析を行う。調査時間は90分から300分程度であり、9名が女装者、3名が女装者愛好男性である。年齢層は女装者が20代から60代まで、女装者愛好男性が30代から50代である。質問項目として、年齢、学歴、職歴、家族構成などの基本的な事柄と、主に女装や女装者との関係性を中心としたライフストーリー、また、女装者や女装者愛好男性としての活動内容、性感染症予防の有無などを聞き取りした。調査は、対象者1-2名と、石井と宮田の二人で行われた。調査にあたり、東洋大学社会学部の倫理審査を受け、また、すべての対象者へ調査の説明を行い、同意書を交わしている。

3 結果

2名の女装者愛好男性と2名の女装者を除き、同エリアを拠点とする対象者の多くが、高校卒業や専門学校卒業相当の学歴であった。また、生活に余裕のある自営業者であったり、大企業に勤めている者がいる一方、生活保護受給者、低賃金労働に従事する者たちがいた。また、対象者の多くは性感染症予防に一定の関心をもっていたが、定期的に自治体などの検査を受けている者は限られていた。対象者たちの性自認は男性であり、女装者の場合、女装を「趣味」や「遊び」などと位置付けている者も多かった。したがって、かれらの語りにおいて、アイデンティティを争点として、かれらの困難性への配慮を求めることはなかった。だが、実際には、女装をすること、女装者との関係性をもつことには、ゲイやトランスジェンダーなどと重なるような、家族関係の不和、スティグマ、孤独、インターネット上でのアウトティング行為、職場を選べないこと、セックスワークや性感染症などのリスクが生じていた。

4 結論

女装者や女装者愛好男性たちの語りは、LGBTQの人々の語りにしばしばみられるような、アイデンティティや人権を土台として、承認や平等、理解を求めるようなものではない。かれらの経験は、趣味や遊びといった文脈で語られ、そのためかれらが抱えるリスクや困難性も、社会的な承認をえがたく、個人的なもののみなされる。しかしながら、そうしたリスクや困難性は軽視されるべきものではなく、また個人的な問題として片づけられるべきものでもない。かれらが置かれている状況について把握し、必要に応じて社会的な支援を提供できるシステムを構築する必要性が生じている。

謝辞 本研究は、日本学術振興会若手研究(B)(17K13849)の研究成果の一部である。